

「小夜の中山」考

——新古今的和歌世界の開示——

中西 満義

はじめに

あづまの方にまかりけるに、よみ侍ける

年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の
中山⁽¹⁾

『新古今和歌集』巻第十「羈旅歌」に収められている右歌は、西行歌の中でもあまりにも著名な一首である。『西行法師家集』では、詞書に「あづまのかたへ、あひしりたりける人のもとへまかりけるに、さやの中山見しことの昔に成りたりける、思出でられて」と記されていることから、

文治二年の「再度陸奥への旅」において獲得された一首と考えられ、西行晩年の到達点を示すものという高い評価を得ている。

さて、この一首の生命がまさしく第四句「命なりけり」にあることは多言を要しないであろう。それにたいして、たとえば、

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事はいのち
なりけり (古今集・春歌下、九七)

や、そのほか同様の句を有している

もみぢばを風にまかせて見るよりもはかなき物はいの
ちなりけり (同・哀傷歌・千里、八五九)

などを参考に示したとしても、西行の「年たけて」歌の本質を把握することは困難であるように思われる。⁽²⁾それは、すでに指摘されているように、他の作品の場合は「命なりけり」が「うは」に接続して結句に置かれているのにたいして、西行の「命なりけり」は確たる主語を持たずに第四句に置かれているという構造上の差異が端的に物語っている。⁽³⁾そして、西行歌の場合は「命なりけり」という詠歎につづいて、一見するとそれとは何の脈絡もない「小夜の中山」という地名（歌枕）が提示されているのであるが、その連繋にも西行の「命なりけり」の独自性、さらには「年たけて」歌の特質は見えて取れよう。

別言すれば、「命なりけり」と「小夜の中山」は、西行という個性においてはじめて結合し得たのであり、その意味で、一首の本質を突き止めるためには、詠歌主体である西行の内面を掘り下げる必要があるだろう。しかしながら、かりに西行の「個」の体験をわれわれが十全に把握し得たとしても、なだらかに詠みくだされてきた上句から第四句「命なりけり」への展開と、さらに第四句から結句「小夜の中山」への繋がりとは、いずれも相当に不自然なものと言

わざるを得ない。

ところで、西行にはかれ自身が自讃（嘆）歌と認定したと伝えられている（『拾玉集』第五）

風になびく富士の煙の空にきえて行方も知らぬわが思ひかな

という一首が存する（新古今集・雑歌中・一六一五）。この「風になびく」歌は、家集においては恋歌として取り扱われている一首であるが、『新古今集』の詞書「東の方へ修行し侍りけるに、富士の山をよめる」と、『拾玉集』などの記事内容によって、「再度陸奥への旅」において獲得された、西行が晩年に至り得た境地を示すものとして受け止められている。それゆえに、この「風になびく」歌は先掲「年たけて」歌と並べて取り扱われることが多く、⁽⁵⁾それぞれの詳細な詠出状況は判然としないものの、二首はともに、王朝和歌の伝統に立脚しつつ、西行独自の和歌世界を開示しているものとして取り扱われている。

右に掲出した西行歌二首の『新古今集』における位置をみると、「風になびく」歌は雑歌（巻第十七、雑歌中）に、「年たけて」歌は羈旅歌（巻第十）にと、二首は別々の部

に収載されている。西行側の資料である家集においても二首は一揃いのものとして取り扱われているわけではなく、それらから同質の述懐を感取し、二首を一つに括ること自体不自然な読みであるのかもしれないが、「命なりけり」と慨嘆する作者の心性は、「行方も知らぬわが思ひ」へと導かれてゆくものであるという思いは拭えない。

「年たけて」歌と「風になびく」歌とが、

あづまの方にまかりけるに、よみ侍りける

東の方へ修行し侍りけるに、富士の山をよめる

と、『新古今集』においては類似する詞書を付されながら、別の部に組み入れられたのは何に原因するのであろうか。これには、さまざまな理由が考えられるが、いつに勅撰集としての全体の調和が重視されたであろうことは想像に難くない。

『新古今集』に撰入された西行歌九十四首の入集状況を確認すると、二首以上が連続して配列されている箇所は二三例（九七八、九七九の贈答は除く、最高は一五三二―一五三六の五首連続）を数える。この連続配列という特色は、『新古今集』における西行歌の取り扱いに関する重要な点

で、そこに撰者たちの西行歌享受の様態を見て取ることも可能であるが、たとえば、「風になびく」歌が巻第十七「雑歌中」において、「鈴鹿山」歌（二六二三）、慈円の「世の中を」歌（二六一四）と組み合わせられて出家者の心の表出（述懐）を提示する配列の要となつて⁽⁷⁾いるように、「年たけて」歌も羈旅歌の配列の中で有効に機能するものと捉えられていたことが考えられるのである。その一つとして、入集歌撰定の際に、あるいは撰入歌を部類・配列する際に、撰者であるところの新古今歌人たちの間に共通に保有されていた歌枕にたいするある明確な意識——イメージの固定とともに部類の意識——が存していたと想像することは可能であらう。つまり、西行の「年たけて」歌に「小夜の中山」という歌枕が詠み込まれていることと、一首が「羈旅歌」に組み入れられたこととは無関係ではないと思われるのである。

先のごとくの標題を掲げておきながら、冒頭に掲げた西行の一首に拘つたのは、これから検討を加えてゆく「小夜の中山」詠の中にあつて、掲出の西行歌が独自の光を放っているがためである。そして、西行の一首が作歌の契機と

もなつて、新古今の歌人たちによって多くの「小夜の中山」詠が生み出されたということも詠歌史では見逃すわけにはゆかない事柄の一つで、わずか一例に過ぎないが、「小夜の中山」と西行との関係は相当に深いのである。

前置きが長くなつたが、右のような西行の「年たけて」歌の取扱ひに関する疑問を設定したうえで、それにたいする私見を提示するという意味合いもこめて、以下に「小夜の中山」詠の具体相に検討を加え、それがどのような変貌を遂げたのかを確認し、そのうえで『新古今集』の部類意識という問題を、巻第十「羈旅歌」の構造を把握することによつて提示したい。

I

歌枕「小夜の中山」は、現在の静岡県掛川市と榛原郡金谷町との間に位置する峠で、旧東海道の日坂宿と金谷宿との間にあつた難所の一つである。本稿においては説明に際して「小夜」に表記を統一して示すが、ほかに佐夜・佐野・佐益などとも記され、小夜・佐夜と表記した場合には、「さ

や」「さよ」の二通りの読みが可能となる。和歌文芸における使用例を見ると、そのいずれの読みも確認されるが、地名の由来となつたと考えられている旧郡名の「佐野」、あるいは地形上の特徴を示すとされる「狭谷」から類推すると、もとは「さや」であつたものと考えられる。⁽⁹⁾それが

此山、ただは「さや」、旅宿などの時「さよ」と読むべし……
(孝範注『自讃歌注』)⁽¹⁰⁾

とあるように、詠法の変化や用いられる修辞技巧などに応じて次第に「さよ」も定着し、両者の使い分けがなされていったのであろう。

さて、『新古今集』には冒頭に掲げた西行の「年たけて」歌を含めて、五首の「小夜の中山」詠を確認することができる。いま、のこる四首を以下に掲げると、

あづまぢのさやの中山さやかにも見えぬ雲井に世をや
つくさん
(壬生忠岑、九〇七)

ふるさとのけふの面影さそひこと月にぞちぎるさよの
中山
(藤原雅経、九四〇)

ふるさとにききし嵐の声もにずわすれね人をさやの中
山
(家隆朝臣、九五四)

岩がねのところに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの
中山 (有家朝臣、九六二)

となる。右に掲げたそれぞれについての具体的な考察は後に譲るが、ここではまず、『新古今集』における「小夜の中山」の全ての用例が巻第十「羈旅歌」に集中していることに注目しておかなければならない。

この現象は、実際の小夜の中山が重要な交通路であった旧東海道の難所に位置していたことからすると、きわめて自然なこととして受け止められるかも知れない。歌枕における実際の地理が、その成立なり、詠法にいかほどの影響力をもって働き掛けていたかは、歌枕によって状況は区々別々で、一通りの説明を施すことはできない。「小夜の中山」についてみると、それが旅中にあっての感懷を詠み込むべき羈旅歌に用いられるということは、『新古今集』での使用状況を見るかぎりにおいては、おそらく何の疑念もなく諒解されるであろう。しかしながら、「小夜の中山」が歌枕として成立を見た初発の時点にたつて捉え直してみると、そこには大きな質的転換が遂げられているのであって、歌枕を和歌文芸における修辭機能の一として捉えるとき、「小夜

の中山」が「羈旅」という限られた部に集中している現象は、看過することができないのである。

そこでつぎに、『新古今集』にいたる「小夜の中山」詠の展開を大まかに把握するために、『千載集』までの勅撰集の用例を中心に辿り、それが右に述べた『新古今集』における特色とどのように係わっているのかを確認することにする。

歌枕「小夜の中山」は、『万葉集』には見られず、『古今集』に二例、『後撰集』に一例、そして『千載集』に二例認められる。

- 1 あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそめけむ (古今・恋歌二・とのり、五九四)
- 2 かひがねをさやかにも見しがけれなくよこほりふせるさやの中山 (古今・東歌・かひうた、一〇九七)
- 3 あづまぢのさやの中山中中にあひ見てのちぞわびしかりける (後撰・恋歌一卷頭・源宗子、五〇七)
- 4 よなよなのたびねのところに風さえてはつ雪ふれるさやの中山⁽¹⁾ (千載・羈旅・八条前太政大臣、五〇二)
- 5 たびねするこのした露の袖にまた時雨ふるなりさよの

中山

(千載・羈旅・律師覚弁、五三八)

「小夜の中山」詠は、八代集では拾遺、後拾遺、金葉、詞花の四集には見出せないわけであるが、右の掲出歌によっても成立期の詠法と、その変化の跡とを大まかに把握することは可能であろう。

1、3の例が示すように、はじめ「小夜の中山」は恋歌に使用される言語として機能していたと考えられる。さらに、1、3の二首がそれぞれ「あづまぢの」という句表現に接続して序詞部を形成していること、2の古今歌が東歌の「かひうた」として収載されていることからすると、それは東国的な色彩を濃厚に帯びた歌語であったと言える。そのことは

6 あづまぢのさやのなか山さやかにも見ぬ人ゆゑにこひ
やわたらん (第二・山、八四七)

7 あづまぢのさやのなかやましげくとも君きまさねばお
もかげもせじ (第六・しをり、四〇三〇)

という『古今和歌六帖』の二例を示せばいっそう明瞭になるのであって、「小夜の中山」は、風俗歌に見るような、その当時の都人が東国に対して抱くイメージを内包しつつ、

恋歌の発想を支える歌枕(歌語)として和歌世界に受け入れられていったものと考えられる。別言すれば、古今集時代にあつて、「小夜の中山」は、すでにその土地の実態が閑却され、ただに「さや」、「なか」といった地名が含み持つ音が感興の主対象となり、「さやか」、「なかなか」という表現を導く、恋歌の詠出契機となる言語として機能していたことが知られるのである。¹²⁾

だが、そのように固定化したイメージが付与された「小夜の中山」は、宮廷社会のなかで洗練を重ねる王朝和歌(そのことは一方で和歌世界の矮小化をも意味していたと思われる)にあつて、次第に歌人たちの興味の対象から除外されてゆき、詠歌素材として顧みられなくなっていったものと思われる。早計にすぎるが、勅撰集に限定すると、『後撰集』ののち『千載集』まで確認できないことは、そのような経緯を物語っているように思われる。

ともあれ、先に掲げた1・5の中では、『千載集』の二例において「小夜の中山」の詠法に転換の図られていることが見て取れる。それは、表面的には部類が恋歌から羈旅歌へ変化したということと処理されるものであろうが、問題

はそこにとどまらない。

4、5の二例のごとく、「小夜の中山」は『千載集』にいたって羈旅歌の詠歌素材として定着をみたわけであるが、それらを仔細にながめると、旅宿を明示する表現とともに、風、はつ雪、（このした）露、時雨といった素材が取り合わされていることが注目される。「行路初雪といへる心をよみ侍りける」（4）、「旅の歌とてよめる」（5）という二首に付された詞書が示すように、それらはともに羈旅歌を詠出するための題によったもので、そのような詠出状況において「小夜の中山」が連想されていることは、『千載集』時代すでに、「小夜の中山」が羈旅歌に相応しい歌枕として歌人たちに認識されていたことを意味している。そして、その際に羈中における心細さをいっそう引き立たせるための素材が配されているのであって、『千載集』の羈旅部の特色に関して、

時雨・露・夢・涙・波・霰などの素材が巧みに組み合わせられて詠まれた歌が多く、しかもそれらを作者の心の中に描いた旅の世界に映し出すという、従来の旅の歌の性格をはるかに越えた詠作の場の拡大と深化が認められる……

められる……⁽¹³⁾

という指摘がなされているが、4、5の二首においてもそのような傾向は確認されるのである。このように、「小夜の中山」は羈中の「あはれ」を増幅させる素材との結合をみて、羈旅歌に相応しい歌枕として成長を遂げていったものと考えられる。

II

前節では、八代集における「小夜の中山」詠を中心に、恋歌から羈旅歌へという部類意識の変化を確認した。数少ない用例からすると、『新古今集』が示す「小夜の中山」すなわち羈旅の歌枕、という観念は、『千載集』において認定されたものであったと言えるが、ここではもう少し詳細にその契機となったものを探るべく院政期の和歌作品を中心に考察をすすめたい。

先掲『古今集』の友則歌と『後撰集』の宗于歌、『古今和歌六帖』の二首、そして『新古今集』に採られた忠岑歌のほか、「小夜の中山」は平安前・中期の和歌作品において、

多くは確認されない。

平安前期の和歌作品においては、既掲のもの以外に、かろうじて「寛平八年六月以前后宮胤子歌合」(大成・一)¹⁴の

東路のさやの中山なかなかに見えぬ物からこひしかる
らむ

という一首(恋・十七番左歌、三三番)を見出だすのみである。先掲古今歌(1)、後撰歌(3)などと同様の修辞によつて構成された右歌は、「小夜の中山」が歌枕として成立をみた時点における詠法を示すものと言ってよく、逢うことがかなわないう状況でのやるせない恋情が表現されている。

その後、「小夜の中山」は『玄々集』に収められている

甲斐がねを見るとかきけばまことにやよよをふりせぬ

さやの中山 (宣孝右衛門権佐・四五)

という一首に見出だすことができる。右歌は、「いどみける女の、甲斐守にあひぬとききて」という状況下に詠出されたもので、一首中の「甲斐がね」は甲斐守を、そして「さやの中山」は(いどみける)女を、それぞれ譬えている。先掲古今歌(2)「かひがねをさやかにも見しがけけなく

よこほりふせるさやの中山」との類似が著しい右の宣孝歌が、『奥義抄』に「盗古歌證歌」の例歌として引かれているのも十分にうなずけるところである。

さて、『千載集』に見るような「小夜の中山」が羈旅の歌に用いられている先行例をもとめると、

旅寝するさよの中山さよ中にしかもなくなり妻や恋し
き

という為仲歌が早い時期の作品として注目される。右の為仲歌は、『為仲集』(一三四番歌)の詞書に「遠州のさやのなか山といふ所にとどまりたるに、しかのいとあはれになきしかば」とあるように、小夜の中山での旅宿の体験をもとに詠出されたもので、『私家集大成 中古Ⅱ』所収の『橘為仲集』(為仲Ⅱ、尊経閣文庫蔵本)の十八番歌詞書に「みちのくにのかみになりてくたらむとし侍しに、……」とある陸奥守として任地へ赴く途次に詠出された一連の作品群に属する(同本によれば、当該歌は三〇番)。旅寝の床に妻恋の鹿を聴くという為仲歌の趣向は、それまでの「小夜の中山」詠に認められなかった新しい点で、それが陸奥守として都を遠く離れてゆく旅人の旅愁を見事に表現し得てい

る。ただ、詠歌主体である為仲において、「小夜の中山」が
羈旅歌に相応しい地名として自覺的に捉えられていたかと
いう問題に関しては、判然としないものがある。加えて、
妻恋の鹿を詠歌主体に重ね合わせて捉えるならば、その表
現世界は『古今集』以来の恋歌としての詠法に立脚した、
その一変型と見ることも可能である。だが、右の為仲歌が、
それが体験に基づいて詠まれたものであるということとはと
もかく、「旅寝する」という句表現が端的に示しているよう
に、それまでにない「小夜の中山」の詠風を確立している
ことは留意されなければならず、彼ら受領層の現地踏査に
よって歌枕の発掘（再認識）が行われたであろうことは興
味深い。

右の為仲歌からの直接的な影響関係は確認すべくもない
が、以後、

高階経敏が相模守にてくだり侍りけるに、父経成が
もとへつかはしける

都をば心にかけてあづまぢのさやの中山けふやこゆら
ん

かへし

旅衣たちし日かずをかぞふればさやの中山はやこえぬ
らん

という『散木奇歌集』（七三三、七三四）にみる贈答歌や、

『堀河百首』の

あらし吹くこぐれの雪を打払ひけふこえぬるやさやの

中山

（「山」・一三六四）

を經過して、「小夜の中山」は羈旅の世界を表現する歌枕と
して定着をみることになる。『散木奇歌集』に収められてい
る贈答歌は、詞書に示されているように、離別歌に属する
ものであるが、「小夜の中山」が都からの隔絶感を表現する
ために使用されていることは注意される。¹⁵そして、つぎの
師頼歌は、組題百首としての規範の確立に大きな功績を果
たし後代の和歌文学に多大な影響を与えた『堀河百首』の
収載歌というにとどまらず、題詠が和歌表現の主流を占め
る状況の中で「小夜の中山」が雑題の「山」によって詠出
されている点で見逃せない。

師頼歌には、古今、後撰、あるいは古今六帖の各例には
見出せず、『千載集』収載歌において特色としてあげられた
もの、すなわち、旅中の述懐といった詠風が感取される。

加えて「あらし」、「(こぐれの)雪」といった冬季の素材を配して旅中の寂寥感を際立たせていることは、先に指摘した『千載集』(さらにはそれ以降の和歌作品)におけるそれと共通するもので、「小夜の中山」詠の展開を辿るうえで、この『堀河百首』での一首は転換点に位置するものと言える⁽¹⁶⁾だろう。

このように、「小夜の中山」は、歌枕として成立する時点において濃厚に有していたイメージが捨象され、都からの隔絶感を象徴する地名、あるいは旅中において苦難を強いられる場所、というイメージが定着することにより、独自の道を歩み始めることになるのである。だが、それは伝統というものに支えられ、裏付けられる「和歌」、ないしは「歌枕」の性格からすると、明らかにその崩壊を意味するのであって、断絶あるいは変貌する地点に和歌史における古代と中世との境界を設定することは可能であろう。

III

表現法に着目して「小夜の中山」詠の展開の跡を詠出の

時代順にながめてみると、中世和歌における表現の萌芽となったものを『堀河百首』時代に確認することができたわけであるが、結果としてそれがただちに『金葉集』や、つづく『詞花集』に反映されることはなかった。このことは、それぞれの集が勅撰集においては異例の十巻であり、また、羈旅は部として特立されることなく「別」などの部に組み込まれたこと、さらにその「別」が、『金葉集』二奏本では十六首、三奏本では二十五首、また『詞花集』では十五首とその枠が極度に切り詰められたこと、などとも無関係ではあるまい。

しかしながら、そのことは、この時期に「小夜の中山」がまったく顧みられなかったということを意味するものではない。『為忠後度百首』での

立待月

兵庫頭 仲正

あづまぢやさやのなかやましげくともはやぬけいでよ
たちまちの月

行路雪

木工権頭 為忠

あづまぢのさやのなかやまふぶきしてささめのころも
かへすたび人

や、死没によって結果的には部類本からは除かれてしまっ
たが、

みやこをばみか月をみていでしかどけふはありあけの
さやのなかやま (忠盛集・「羈旅五首」・九六)

という『久安百首』での忠盛詠にも見受けられ、『堀河百首』
の師頼歌に学んだ形跡は確認される。

『為忠後度百首』の為忠歌は、『堀河百首』の師頼歌に同
じく行路を雪に阻まれる旅人を描いたもので、第四句に「サ
ヤ」に通ずるサ音を重ねる「ささめのころも」を用いてい
るところが新しい。また、忠盛歌は「みやこをばかすみと
ともにたちしかど秋風ぞふくしらかはのせき」(後拾遺集・
第九・五一八)という能因の著名な歌を機知的に援用して
いるところが斬新な試みと言えるが、仲正歌に同じく「小
夜の中山」に「月」を配していることも留意される。

このように、百首歌という他歌人の作品との出来映えが
競われる場において、『堀河百首』時代に新たな展開をみた
「小夜の中山」の詠法が着実に受継され、そこに工夫が加
えられていることは、次代への橋渡しの役割を果たした
ものとして看過できないが、右のほかにも、『千載集』にい

たる間に、「小夜の中山」はさまざまな素材をともなって羈
旅歌としてさかんに詠まれ、発展期を迎えることになる。

a 白雲のかかる高嶺とみゆるかな雪ふりつもる小夜の
中山

b けけらなくたなびく雲か月のかげさやの中山さやにみ
べきを

c 都人おもひしもせじふぶきしてさよの中山けふはこゆ
とも

d つもりける雪ばかりかは木の間より月もしぐるる小夜
の中山

e 八重霞さやの中山立(ち)こめてをちこち人や道たど
るらむ

f けさも猶あまぎる雪のなほふれば駒もなづみぬさやの
中山

g よをこめてたつ霞だになかりせばひとりこゆらんさや
の中山

a は『久安五年七月 山路歌合』(大成・七)の連覚法師
詠(夫木抄・巻第十八にも)である。実際の小夜の中山は
標高わずか二五〇米程度であるわけだが、そこでは急峻な

山路（高嶺）と捉えられ、「白雲」に見紛う「雪」が景物として配されている。これはあたかも同じ東海道の著名な歌枕「富士」に付与されたイメージを移し変えたようで、一首が観念の働きによって詠出されたものであることを窺わせる。bは『重家集』に「大殿より月御歌三十五首下し給ひて、此定によりてたてまつれとおほせられしかば」とあるうちの一首（七二）で、「月歌」として「小夜の中山」を詠んでいるところ、『為忠後度百首』の仲正歌に共通する。そして、「旅行雪」題によるcの清輔歌（清輔集・冬・二一〇）は、「雪朝越山」題によるfの俊恵歌（林葉集・冬・六〇九）とともに、「雪」という冬季の景物を取り合わせたもので、先の師頼歌、為忠歌に同じく吹雪によって行路を阻まれる旅人が思い描かれている。また、dの『安元元年閏九月十七日右大臣兼実歌合』（大成・八）の頼政詠（頼政集・冬・「月照山雪」・二六〇）は、「雪」「月」といった景物を配して、冬期の小夜の中山を描出している。さらに、eの『治承二年三月十五日権禰宜重保別雷社歌合（乙本）』（大成・八）の修範歌では旅人の行路を遮るものとして「八重霞」が、そしてgの経盛歌（月詣和歌集・羈旅部・二四〇／経盛集・

六にも、第四句「ひとりやこえむ」でも、「暁路霞」の題意のごとく、春季の「霞」が配されている。⁽¹⁸⁾

このように、千載集前夜とも言うべき時期に、『堀河百首』の師頼歌によって創出された新しいイメージが追認され、「小夜の中山」が羈旅歌、あるいは羈旅世界をイメージさせる歌の中に詠み込まれていることは、先にみた『千載集』、ひいては『新古今集』へと展開してゆく状況において、決して軽々に取り扱うべきものではないと思われる。

さらに、ここで右に掲げた歌の作者に目を転じてみると、六条藤家の清輔・重家、歌林苑歌会の主催者俊恵、あるいはその会衆とされる頼政などといった歌人の名前が並び、「小夜の中山」は六条藤家や歌林苑周辺の歌人たちが積極⁽¹⁹⁾的に自歌に採用した歌枕であったことが知られる。旧稿に⁽²⁰⁾おいて院政期後期から中世初期にかけての「諏訪湖」の流行現象を取り扱った際にも、右のような六条藤家・歌林苑周辺の歌人たちの動向が注意されたのであったが、「小夜の中山」においてもほぼそれと同様の現象が確認されるのである。もともと、「諏訪湖」の場合には『千載集』の成立前夜の歌林苑周辺の歌人たちによる流行現象がかえって俊

成、さらには定家の心証を害する結果を招き、それが勅撰集入集を阻む要因になったのではないかと推測したのであったが、「小夜の中山」の場合はそれとは多分に様相を異にし、『千載集』に二首、そして『新古今集』に五首の入集を見ている。

しかしながら、「小夜の中山」においても、「諏訪湖」の場合と同様なことは指摘できそうに思われる。すなわち、右掲の一連の作品と『千載集』撰入の二首とが、作品の完成度としていかほどの径庭を示しているかは意見の分かれるところであろうが、俊成が『千載集』を編纂する際に、右の六条藤家・歌林苑周辺の歌人たちの作品を採ることをせず、八条前太政大臣（藤原実行）と律師覚弁（俊成息）の二首を撰入したということは、事実上、六条藤家・歌林苑周辺の歌人たちの試みを無視したことを意味しているのではないだろうか。そのあたりに俊成の撰歌意識の一端なり、六条藤家に対する対抗意識などを窺い知ることは可能であると思われる。

ともあれ、『堀河百首』の師頼歌をはじめとする多くの詠歌の蓄積を基盤にして、『後撰集』ののち跡絶えていた「小

夜の中山」詠の勅撰集への入集が、恋歌から羈旅歌へと変貌を遂げたかたちで、『千載集』において果たされたのである。このことは羈旅歌としての詠法が俊成によって事実上認定されたことを意味し、「小夜の中山」は以後も継続して発展する可能性を与えられたのである。⁽²¹⁾

右のような発展期を経て、「小夜の中山」は『新古今集』成立前夜の晴儀の歌合、定数歌においても多く詠み込まれることになった。ここでは、煩を避けて、『六百番歌合』での良経歌と、『正治初度百首』・『正治初度百首』の詠歌を例示して、その傾向を瞥見するにとどめるが、それによっても『新古今集』成立前夜の「小夜の中山」の展開の跡を窺い知ることは可能である。

まくらにもあとにもつゆのたまちりてひとりおきゐる
さよの中山

（六百番歌合・恋五・二十五番左・八八九）
右の良経歌（秋篠月清集・三七四）は、「旅恋」という題が端的に示しているように、「小夜の中山」に託されたイメージの伝統的な要素（やるせない恋情）と『堀河百首』

時代以降に新しく認定された要素（羈旅中の孤愁）とが折衷的に組み合わせたもので、「小夜の中山」詠の中では注目値する。事実、右歌は、『六百番歌合』では「露の玉かたがたちるらんさよの中山、旅の心もふかくこそおしはかるれ」という判詞（俊成判）が付され、勝を与えられている。そして、建久九年成立の『後京極殿御自歌合』（六十五番・右）に自撰していることからしても、「旅恋」から「小夜の中山」を想起したこと、つまり「小夜の中山」を「旅恋」というイメージと結び付けて捉えたことは、良経自身、意を尽くしたところであつたと思われる。さらに、右歌のほかにも

あけがたのさやの中山つゆみちてまぐらのしたに月を見るかな（月清集・四八三、治承題百首・旅五首）

くもはねや月はともし火かくしてもあかせばあくるさ

やの中山（月清集・七八二、院初度百首・羈旅五首）

という、羈旅歌でありながら恋歌的な「艶」を含んだ二首が存することによつても、良経の「小夜の中山」を捉える一貫した姿勢は窺われる。

それでは、その「旅恋」といったイメージにおいて「小

夜の中山」を捉える認識は、良経に独自のものであつたかと言うと、必ずしもそうとは言えない。それは、『古今集』当時、つまり「小夜の中山」が歌枕として認定されたときからすでに胚胎していたものであつたとも言えるし、さらに先掲の作品のいくつかにおいても確認されるものであつた。そして、「くもはねや」歌の詠出契機となつた『正治初度百首』の同じ「羈旅」題による「小夜の中山」詠に目を転ずると、

都にて雪まはつかにもえいでし夢ひきむすぶさよの中山⁽²²⁾（前斎院・二八四）

跡もなくやへたつ雲に道分けてなみだしぐるるさやの

中山（守覚法親王・三八四）

旅ごろもしをれぬ道はなけれども猶露ふかしさよの中

山（釈阿・一一八六）

岩がねの枕におつる松風の夢路たえぬるさよの中山

（丹後・二一八四）

と、俊成の「旅ごろも」歌を除いた三首が、いずれも「旅恋」的世界を表現する語を含んでいるのであつて、そのことからすると「小夜の中山」は当時の歌人たちに恋の余情

を表出する可能性を提供する歌枕であったと言える。さらに、「個」の旅という視点において羈旅歌を捉えるならば、そこには旅愁というかたちで表面化する、日常の恋愛から遠ざけられることを余儀無くされた孤独感の表出が予定されているのであって、羈旅歌は恋歌に通底する要素を多分に有していたとも言える。

このように、『新古今集』成立前夜の歌壇においては、『堀河百首』の師頼歌をはじめとして、『千載集』にいたる間に承認されてきた共通認識（それは、むしろ本歌ないしその本意を無視した試みであったとも言える）にたいする修正がなされているのであって、『新古今集』へといたる水脈が、あたかも穏やかな一本の流れのようでありながら、じつはさまざまな伏流をともなっていたことが確認されるのである。それはまた、この時期につきのようなかたちで「小夜の中山」が詠み込まれていることによっても理解されるだろう。

秋の月くまなきころはとまりせしひるにやかはるさよ
の中山
(後鳥羽院・七三)

ながき夜のさよの中山明けやらで月にあさたつ秋の旅

人 (雅経・二七二)

袖におく露打ちはらひ月かげとともにすぎ行くさ夜の

中山 (越前・九七二)

すぎきつる旅の哀を人とはば月にこえこしさよの中山

(慈円・一〇六九)

右掲の四首は、いずれも『正治後度百首』におけるもので、それぞれが「山路」題によって「小夜の中山」を想起しているところ、加えて、すべてが「月」を配しているところは注目に値する。「小夜の中山」と「月」という素材の取り合わせは、すでに先掲仲正歌などに見られたもので、けっして新しい試みとは言えない。だが、同一の機会に、しかも同一の題によって右のような歌が詠出されていることは、そこに共通の意識が存していたことを窺わせるが、さらに、そこに共時的な影響関係があったことをも想起させるのである。

ともあれ、九条家歌壇から後鳥羽院歌壇へと展開してゆく状況の中で、「小夜の中山」は、集団の場において、さまざまな試みのもと積極的に詠まれたのであった。とりわけ、良経歌に代表されるような「艶」を含んだ「旅恋」的な世

界を表現した「小夜の中山」詠の存在は注目されたのであったが、そのような歌は『新古今集』に入集を果たすことはなかった。そのことの意味は、つぎに改めて考えてみなければならぬ。

IV

羈旅部は、はやく『古今集』において独立した部立として見られ、勅撰集の全体構造の中では離別部と対をなすものと認識されていた。⁽²³⁾そのことは代々の勅撰集をとおして確認される全般的傾向であって、『古今集』では巻第八に「離別」が、巻第九に「羈旅」がそれぞれ配置されていることによっても知られる。つづく『後撰集』では、「離別」と「羈旅」が巻第十九に一括して収められているものの、両者は小部立にとどめられている。そして、『後拾遺集』では『古今集』に同じく巻第八に「別」が、巻第九に「羈旅」が組まれているが、先にも述べたように、『拾遺集』『金葉集』『詞花集』の三集においては「別」だけが部立として取り上げられて羈旅の部は特立されていない。また、収載歌数

が『古今集』では「離別」四一首にたいして「羈旅」一六首であることからすると、王朝和歌においては惣じて「羈旅」と比較すると「離別（別）」のほうが優勢であったことが窺われる（『後拾遺集』の場合は「別」三九首にたいして「羈旅」三六首で、拮抗した数字を示している）。

ところが、その様相は『千載集』にいたって一変する。すなわち、『千載集』では巻第七の「離別」が二三首であるのにたいして、巻第八「羈旅」は四七首を収め、両者間に逆転現象が生じている。そして、『新古今集』においては、その傾向がいつそう顕著になり、巻第九「離別」が三九首、巻第十「羈旅」が九四首となっている。さらに、後続の十三代集では、すべてに「羈旅（旅）」が部立に見られるのにたいして、「離別」は七集に見られるものの、その他の六集（新勅撰・続後撰・続拾遺・玉葉・続千載・風雅）には見られない。以上のように、羈旅部を離別部との対比において、その展開を概括的に捉えてみると、「小夜の中山」の詠法の変化も、和歌文芸全般の傾向——実情歌から題詠歌へという変化、羈旅歌にたいする意識の変化など——と不可分に関係していることが知られるのであるが、とりわけ、

千載・新古今両集は、それまでの王朝和歌の伝統を踏まえつつも、ある明確な意識のもとに和歌文芸の変革を図ろうとしたことが推察されるのである。

さて、『新古今集』巻第十・羈旅歌の構造の特色については、すでに有吉保氏⁽²⁴⁾、奥田久輝氏⁽²⁵⁾、安田徳子氏⁽²⁶⁾などによって論じられている。いま、風巻景次郎氏の『新古今集』全体にわたる論⁽²⁷⁾なども参照してその特色をまとめると、およそつぎのようになるかと思う。

- 1、収載歌は旧歌人群と当代歌人群とに二分される⁽²⁸⁾
- 2、1の旧歌人群の歌はほぼ時代順に配列されている
- 3、同一歌人や同一歌材の歌を二首以上並べて配列する傾向がある
- 4、部類期から竟宴期にかけて相当大きな補入が行われた

5、4の補入歌が「羈旅歌」一巻の表現世界をいっそう際立たせることになった

右の項目は、さらに

新旧和歌の対比・対照（1・3）

補入歌の問題（4・5）

に大別することが可能であるが、その二点は「小夜の中山」詠をはじめとする歌枕・地名歌においても確認されるのである。ここでは、「小夜の中山」詠を主対象として、それぞれの意味を捉え直してみたい。

まず、新旧和歌の対比・対照ということは、それからは集の名の由来にふさわしい意図が汲み取れるわけで、各部分に立あるいは各部分によって位相は異なるものの、『新古今集』の配列に大きな影を落としているものである。巻第十「羈旅歌」をながめると、右の1、2のほかに、巻頭に据えられている元明・聖武両帝の歌にたいして巻軸に後鳥羽院の歌が配されているところにもそれは顕著であるが、さらに、奥田氏が指摘されたように、旧歌人群のなかの貫之歌（九〇五と九〇六）・忠岑歌（九〇七）と当代歌人群の定家（九五二と九五三）・家隆（九五四）との対応、など細部にわたって確認することは可能である。

そして、羈旅歌に収載されている歌枕、地名歌に注意を払うと、それらも新旧歌人群それぞれに対応するかたちで配されていることが知られる。本稿が取り上げている「小夜の中山」がすなわちそれで、旧歌人群の壬生忠岑の

A あづまぢのさやの中山さやかにも見えぬ雲井に世をや
つくさん

という一首にたいして、当代歌人群には

B ふるさとのけふの面影さそひこと月にぞちぎるさよの

中山

C ふるさとにききし嵐の声もにずわすれね人をさやの中

山

D 岩がねのところに嵐をかたしきてひとりやねなんさよの

中山

E 年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山
の四首が配されているが、このような対応関係は、ほかに

「浅間の嶽」(九〇三と九五八)、「宇津の山」(九〇四と九八

一・九八二・九八三)、「伊勢の浜荻」(九一一と九四三・九

四四・九四五) などにも認められる。ことに、「宇津の山」

と「伊勢の浜荻」においては、

F 駿河なる宇津の山辺のうつつにも夢にも人にあはぬな

りけり

(業平・九〇四)

G 神風の伊勢のはまおぎおりふせて旅寝やすらんあらし

浜べに

(よみ人しらず・九一一)

と、ともに旧歌人群の歌一首にたいして、「宇津の山」は、

H 旅寝する夢路はゆるせ宇津の山関とはきかず守るひと

もなし

(家隆・九八一)

I 都にもいまや衣をうつの山夕霜はらふつたのした道

(定家・九八二)

J 袖にしも月かかれとは契をかず涙はしるや宇津の山ご

え

(長明・九八三)

の三首が、また、「伊勢の浜荻」は、

K いく夜かは月を哀とながめきて浪におりしく伊勢のは

まおぎ

(越前・九四三)

L しらざりし八十瀬の浪をわけすぎてかたしく物は伊勢

のはまおぎ

(丹後・九四四)

M 風さむみ伊勢のはまおぎわけゆけば衣かりがね浪にな

くなり

(匡房・九四五)

の三首が、当代歌人群の歌の中でそれぞれ連続して配列さ
れており、「小夜の中山」の場合よりも明瞭な対比構造を示
している。

右に掲げた歌枕・地名歌を軸に据えた新旧和歌の対比・

対照は、すでに安田氏の注目されたところであるが、それ

らが『新古今集』以前の七代集においてはあまり著名なものではなかったこと（「宇津の山」は『新古今集』初出。「伊勢の浜荻」は『千載集』初出、五〇〇・一〇八九）、そして、『新古今集』の撰入歌がいずれも巻第十の「羈旅歌」に部類されていること（「伊勢の浜荻」に關係するものとして、ほかに「伊勢島」一例、一六一二）からすると、その現象は「羈旅歌」構造上の特色の一端を形成するものと言つて差し支えないだろう。つまり「小夜の中山」についてみると、五首という多数が撰入されたこと、さらにすべてが「羈旅歌」に配されたことは、すでに見てきたように、『千載集』にいたつて明確にされた部類意識をさらに徹底させた結果と一応は受け止められようが、「宇津の山」「伊勢の浜荻」そのほかの例を考え合わせるならば、それに加えてそこに配列に關する明確な意図の存したことを無視することができないのである。

それに関して、たとえば、同集・巻第一、春歌上六八―七五番に位置する「青柳」を配する作品群を例に取つて、配列の仕組みを説明した

伝統的な歌材に新古今的な世界を付加して再登場させ

るときには、新たに開拓された「新」の世界に「古」の世界を対照させることによつて印象を鮮明にするという配列方法がとられていたとみられる。ただし、この場合、「古」の世界は、単に新古今が生み出した世界の添え物ではなく、その新しさを確認し得るための伝統的世界として位置付けられているとみるべきであろう。⁽³⁰⁾

という田村柳壺氏の指摘は、状況はやや異なるものの、同一歌材による新旧の対比・対照という点で、この場合においても参照すべきものであると思われる。

右のような視点を「羈旅歌」の歌枕・地名歌を軸とした新旧和歌の対比・対照にも導入するならば、Aの忠岑歌は、ただにCの家隆歌にのみ対応しているのではなく、他の「小夜の中山」詠とも響き合っていると理解されるが、さらに、その忠岑歌が、「むかしものなどいひはべりしをんなの、なくなりしが、あか月がたにゆめにみえはべりしかば」という詞書（「三十六人集本」では「ころさし侍女に」）を有する歌であるにもかかわらず、「題しらず」と詠歌状況が捨象されて「羈旅歌」に部類されたことの意味も諒解されよう。

つまり、Aの忠岑歌は、「新」の世界の印象を鮮明にするために用意された「古」の世界を代表する歌であって、『古今集』の二首に代表されるような、「小夜の中山」が歌枕として成立をみた時点における詠風を示しているものとしてただ一首採られたのである。その意味では、Aの忠岑歌から逢うことがかなわないう嘆きといった恋の余情を感取することとは許されようが、「羈旅歌」の一首として捉えた場合の表現内容の曖昧さは免れない。

ともあれ、右のようなAの忠岑歌の入集に際しての「読み替え」⁽³²⁾からすると、巻第十「羈旅歌」において、歌枕・地名歌を軸とした新旧和歌の詠み方競べとでも言うべきものが意図されたことは確かで、他の四首の「小夜の中山」詠は「新」の世界を創出するために撰入されたと考えられる。すなわち、当代歌人の「小夜の中山」詠のなかから入集歌を撰定する際には、「古」の世界を代表するものとして据えられたAの忠岑歌とは異なった詠法や詠風を示す歌が求められたのであって、そのような基準によってBの雅経歌、Dの有家歌が、そしてEの西行歌が、さらにはCの家隆歌が撰ばれたものと考えられる。したがって、「旅恋」に

よって詠出された先の良経歌などは、忠岑歌の表現に通底する恋歌的な「艶」を多分に有するがゆえに、当代歌人群における入集歌の枠から除外されて、「新」の世界に参入する途を閉ざされたとも想像されるのである。

このように、歌枕・地名歌を中心として羈旅部の構造を閲してくると、歌枕の採択自体に相当に偏った好尚が窺われたのであったが、それはまたそれぞれにおける「古」と「新」の比重にも確認されるのである。田村氏の先の指摘にあるように、「古」が単なる「新」の添え物でないことは言うまでもないが、一見して判るように「新」重視の姿勢は否み難く、新旧和歌の対比・対照の構造を明瞭にするこ

とによって意図されたことは、当代和歌、ひいては当代の称揚であったと考えられる。

それでは、当代和歌の称揚を意図しつつ、そこで創出しようとした表現世界はいかなるものであったのだろうか。つぎに、そのことを考えるために、補入歌の問題について検討を加えてみたい。

『新古今集』の部類、撰修時期に増補された歌は相当数にのぼるが、「小夜の中山」詠のなかではCの家隆歌がそれ

に該当する。家隆歌は元久元年十一月十一日催行の『北野宮歌合』での詠であるが、当歌合から『新古今集』に撰入されたものは、総数で四首を数える。その四首のうち、後鳥羽院の一首（恋一・一〇二九）を除いた「羈旅」題の三首は、九五四（当該、家隆歌）・九五五（雅経歌）・九五六（家長歌）と、「羈旅歌」に連続配列をみている。

この『北野宮歌合』での詠三首を「羈旅歌」に補入したことによって生じた特色は、「山」「嵐」の語を含む歌の増加であり、「羈中晩嵐」とも言うべき旅宿の孤愁であるが、少しく穿った見方をすれば、それはすでにDの有家歌を撰入することによって充分に達成されていたのではないだろうか。すなわち、「古」の世界を代表する忠岑歌にたいしては、すでに三首の「小夜の中山」詠が「新」の世界を代表するものとして用意されていたのである。それにもかかわらず、そこにあえてCの家隆歌が増補されたことは、Bの雅経歌、ことにDの有家歌が示す表現世界の徹底が意図されていたと理解されるが、それはただに「小夜の中山」における當代歌人群の詠歌の増加にとどまらず、「羈旅歌」全体の表現世界の創出にかかわる増補であつたと推測されるのである。

る。

このように、部類、撰修時期における増補歌の存在をも考慮すると、「羈旅歌」における歌枕・地名歌を軸とした新旧和歌の対比・対照にみられる偏向は、部類（配列をふくむ）作業の段階において多大な影響力を有した後鳥羽院の撰集・部類意図といった問題へと収斂されるものであるだろう。⁽³⁵⁾

「小夜の中山」はすでに『千載集』において羈旅歌に相應しい歌枕として認定されていたのであるが、それを五首もの多数「羈旅歌」に限定して撰入したということ、加えて、これもすでに『堀河百首』の師頼歌によって試みられていたとは言え、「小夜の中山」を「嵐」という素材が持つイメージと重ね合わせて捉えたことは、後鳥羽院の意思によるところが大きかったと思われる。ことに、不穏な社会情勢を背景とした時代意識を反映した素材とも受け止められる「嵐」と結合させて「小夜の中山」を捉えたところには、後鳥羽院が「羈旅歌」一卷において創出しようとした表現世界が集約されているように感じられるのである。

『新古今集』の「羈旅歌」は、行幸、従駕などといった

公的な目的を主とした旅をはじめ、さまざまな旅を取り扱っている。それに関しては異論はないのであるが、惣じてそこに描き出されている世界は、個人のそれであるように思われる。⁽³⁷⁾『伊勢物語』の「東下り」における「昔男」のイメージを彷彿とさせる、さらにそれよりもいつそう徹底された深刻痛切な「個」の旅の創出は、一卷中に多くを占めている当代歌人の歌によって顕著であるが、それを現出させるために「小夜の中山」が、さらには「宇津の山」、「伊勢の浜荻」が「羈旅歌」に組み込まれたと想像することは許されるであろう。そして、西行歌を含めた「小夜の中山」詠四首も、そのようなイメージ創出のための装置の一つとして、有効に機能していると考えられるのである。

V

『千載集』・『新古今集』という中世和歌の初発に位置する勅撰二集において積極的に支持され、樹立された「小夜の中山」のイメージは、以後、決定的な影響力をもって代々の勅撰集に受継されてゆくことになる。そのことを簡略に

把握するために、十三代集各集における「小夜の中山」詠の用例数と羈旅部に収載されている数とを表にして掲げることにする。⁽³⁸⁾

	9 新勅撰	全用例	羈旅		全用例	羈旅
* 10 続後撰	1			* 16 新続拾遺	4	4
* 11 続古今	3			17 風雅	3	2
* 12 続拾遺	2			* 18 新千載	5	5
13 新後撰	4			* 19 新拾遺	3	3
14 玉葉	0			* 20 新後拾遺	1	1
* 15 続千載	3			21 新続古今	4	2

表中*印をもって示したように、十三集中の八集が、千載・新古今両集において確立された「小夜の中山」詠の觀念をほぼ全面的に支持・継承していることが知られる。十三代集における「小夜の中山」の用例三四例のうち、羈旅部以外に収載されているものは、9 新勅撰の一二九二番歌（雑歌）、13 新後撰の一八四番歌（夏歌）、17 風雅の五一五番歌（秋歌）、21 新続古今の二六六番歌（夏歌）・一三二七番歌

（恋歌）の五例で、さらに恋歌として部類されているものは21新続古今の一三二七番歌の一首のみである。このように、「小夜の中山」詠の85%に相当する二九例が羈旅歌として収載されていることは、例外は認められるものの、十三代集はおおむね『新古今集』が樹立した和歌世界を踏襲したものであるという一般的・概括的な認識を裏付けられるものと言えるだろう。

右のような状況の中で、『新勅撰集』と『玉葉集』の二集における状況は少しく注意を要する。ここでは、「小夜の中山」詠が『玉葉集』に一例も見出だせない事実がどのような意味を持っているかは詳かにし得ないが、『新勅撰集』の状況に関しては、それが『新古今集』に引き続いて成立したものであるだけに、『新古今集』との差異を明確にするうえで、検討を加える必要があるだろう。

『新勅撰集』に撰入されている「小夜の中山」詠は、
ひかりそふこのまの月におどろけば秋もなかばのさや
のなか山（巻第十九・雑歌四・一二九二）

という家隆の一首である。定家が撰んだ右の家隆歌は、「前関白家歌合に、名所月をよみ侍りける」とあるように、道

家主催の貞永元年八月十五日「名所月歌合」（三番左）のものである。そこでは、実持^{マツ}の「ゆふなぎの明石のとより見わたせばやまとしまねをいづる月かげ」（新勅撰にも、一二二・初句「ゆふなぎに」、作者内大臣実氏）と合わされて、さやの中山たびに出でて、木のまの月の光そへたるに、秋の半をおどろける、心詞珍敷、興あるよし各申す、と評され、持となっているが、定家は、敢えてこの一首を「小夜の中山」を代表するものとして撰入しているのである。³⁹⁾

すでに見てきたように、「小夜の中山」は、さまざまな素材をとないつつも、千載・新古今時代に羈旅歌に相応しい歌枕として定着をみたのであった。いま、そのような経過を踏まえて『新勅撰集』に撰入された右歌をみると、「小夜の中山」にたいする認識の相違が見て取れよう。つまり、「月」の名所として捉えられた右歌が撰び出されたこと、そして、それが羈旅部ではなく、雑部に収められていることは、『新勅撰集』における定家の撰歌意識を端的に示していると思われる。それは、『千載集』、とりわけ『新古今集』において支持されてきた、「小夜の中山」すなわち羈旅の歌

枕、という認識に異を唱えるものではなかっただろうか。

『新勅撰集』は『新古今集』について編纂された中世期を代表する勅撰集でありながら、しばしば両者は好対称の傾向を示すものとして取り扱われ、その差異が具体的に論じられてもきた。⁽⁴⁰⁾たとえば、

新古今、むかしの歌のやさしきすがたに立ちかへりて、
「折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむとする玉
笹の上のあられ」など申すべきを、あまりにたはれす
ごして、歌のさま、またあしざまになりぬべしとて、

新勅撰は、おもふところありて、まことある歌を選ば
れたり、
（『夜の鶴』⁽⁴¹⁾）

という言葉は、『新古今集』と『新勅撰集』との差異を語る場合にしばしば引用されるものであるが、右の文に強調されているような『新古今集』での行き過ぎた傾向を是正しようとする意識なり姿勢が晩年の定家の裡に存したであろうことは確かで、それが『新勅撰集』の性格を規定する要因の一つとしてあることは否定できないように思われる。⁽⁴²⁾そしてまた、『新古今集』自体に右のような批評を受ける要素が存していたことも疑いのないところで、それは、

先に指摘したように、「羈旅歌」の歌枕を採用する際の偏向や、その歌枕・地名歌の採用の仕方においても確かめ得るのである。このように見てくると、『新古今集』における撰入歌の部類・配列に関しては、後鳥羽院の意向が最重要視されたであろうことが改めて想起されるのである。

この後鳥羽院と定家との歌集編纂に関わる意識の相違、ひいては歌観の相違は、つぎに示す『定家八代抄』における「小夜の中山」詠の撰歌状況を確認することで理解されるのではないだろうか。

東路のさやの中山さやかにみえぬ雲るによをやつく
さん
（巻第十・羈旅歌・忠岑、七九八）

あづまぢのさやの中山なかなかになにしか人を思ひそ
めけん
（巻第十一・恋歌一・友則、九一九）

かひがねをさやにもみしかけけなくよこほりふせる
さやの中山

（巻第十八・雑歌下・あづまうた、一七四三）

もちろん、『定家八代抄』と勅撰集との性格の違い⁽⁴³⁾ということも考慮しなければならぬし、また、その相違を後鳥羽院と定家の和歌観の違いといった点に短絡させる危険も

存するであろう。が、右の「小夜の中山」詠と、『新古今集』におけるそれとを比較すれば、撰歌傾向の違いは明瞭で、なかでも、『新古今集』入集歌のなかからただ一首、忠岑歌を採歌しているところに、定家の「小夜の中山」にたいする意識⁽⁴⁴⁾、さらには『新古今集』にたいする批判意識が如実に示されているように思われるのである。

このように、『新勅撰集』と『定家八代抄』における「小夜の中山」詠の入集状況を具体的に見てくると、『新古今集』におけるそれがいかに偏りのあるものであるかが明らかに⁽⁴⁵⁾なる。これによって、定家の撰歌意識にたいして是非を問うているのでも、『新古今集』における偏向を非難しているのでもない。ただ、右のような比較をとおして眺めてみると、全体のバランスを損なっているともみられるような『新古今集』の部類や配列が、後鳥羽院の意思によって成し遂げられたものであることが明瞭になるのであって、後鳥羽院の意向が『新古今集』の編纂作業のなかで多大なウエイトを占めていたことを、ここで確認しておきたい。

おわりに

以上のような考察をとおして、はじめに掲げた西行歌にたいする疑義に立ち返ってみると、「年たけて」歌が羈旅歌の一首として入集を果たした蓋然性が理解されるであろう。すなわち、西行の「年たけて」歌は、「小夜の中山」という歌枕を詠み込んでいるがために、「風になびく」歌との等質性が認められるにもかかわらず、それとは切り離されて「羈旅歌」の一首として組み入れられることになったと考えられる。そして、西行歌は、結果的には補入歌一首を含めた「小夜の中山」詠五首中の一首として位置付けられることになったわけであるが、そこでは当然の事ながら他の「小夜の中山」詠との比較が予定されていたのである。いわば、「小夜の中山」の「古」と「新」との詠み方競べの中に西行の「年たけて」歌も置かれることになったわけで、「古」の世界とも「新」の世界とも異なる表現が一卷のうちに配されることによって、西行の一首は独自性をよりいっそう際立たせる結果となったのである。

ただ、当然のことながら、勅撰集撰入歌には集合体としての美を構成するための一要素という制約が存したであろうことも見逃すわけにはゆかない。「羈旅歌」巻軸の後鳥羽院歌から数えて三首前という、西行の「年たけて」歌の配列上の位置を考慮すると、西行が小夜の中山で表出した「命なりけり」という、「ゆくえもしらぬわがおもひ」にも通ずる「個」の述懐は、歌の内部に閉じ込められて、表面的には苦難の旅を強いられてきた旅人が越え煩っていた小夜の中山をようやく越えることができた、⁽⁴⁶⁾ という意味合いのものに変質されていることも理解しなければならぬ。業平ならぬ「昔男」のそれよりもさらに厳しい漂泊の旅を強いられた旅人が、小夜の中山を越えることによってその旅の終りを意識し、「おもひおく人」のいる「都」の「夜さむ」を想起するところで、この「羈旅歌」一卷は幕を下ろすのであって、西行の「年たけて」歌は、あるいはそこに詠み込まれている「小夜の中山」は、その際に「都」を遠く離れた旅人が忘れかけていた「都」を思い起こすコードとして機能しているのである。

ともあれ、「小夜の中山」という歌枕は、新古今時代の歌

人たちの好尚にかなった「月」「嵐」などとの結合をみることによって、羈旅歌に相応しい名所として認識され、積極的に詠出されたのである。その推進役として、西行晩年の「年たけて」歌の存在もさることながら、後鳥羽院の存在は忘れることができないのであって、後鳥羽院という稀有の推進力を得ることによって、「小夜の中山」が新旧和歌の対比・対照のための機能を担わされて、『新古今集』の「羈旅歌」に定着をみたということを、繰り返し強調しておかなければならない。加えて、その前段階として『千載集』と『新古今集』それぞれの成立前夜に「小夜の中山」の共時的な摂取が存在したことも見逃すことができない現象で、結果的にはそのような気運を反映するかたちで千載・新古今の二集が「小夜の中山」詠を撰入したという結果も確認することができた。

おわりに、西行の「年たけて」歌に拘るならば、ほぼ詠出時期を同じくする『千載集』成立前夜に詠まれた多くの「小夜の中山」詠と比較することによって、その独自性は理解されるだろう。そして、「年たけて」歌は以後の「小夜の中山」に少なからぬ影響を及ぼしたと指摘されてもいる

が、如上の考察の結果、それは『新古今集』の成立前夜の詠歌にも類例を見ないものであることが知られた。そのことは『新古今集』巻第十「羈旅歌」に配された五首の「小夜の中山」詠を比較することによっても明らかなのであるが、同時にそのことは、『後鳥羽院御口伝』に示されている西行ならびに西行歌にたいする高い評価が、すでに『新古今集』編纂の時点において確立されていたことを物語っているように思われる。

注

- (1) 引用は新日本古典文学大系・11『新古今和歌集』(田中裕氏・赤瀬信吾氏校注、岩波書店)により、一部表記を改めた。以下、『新古今集』の引用は同書による。また、特別に注記を施していない歌の引用は、すべて『新編国歌大観』第一巻・第十巻による。歌に付した番号もそれに同じ。
- (2) 山本幸一氏『西行の世界』(塙新書53、昭54)は、「年たけて」歌詠出の基盤に『伊勢物語』八二段の「忘れては夢か

とぞ思ふ思ひきや雪ふみ分けて君を見むとは」と掲出の古今集・九七番歌の作品世界からの影響を指摘したうえで、「思ひきや」の下には「君を見むとは」が、そして「命なりけり」の主格として「あひ見むことは」が、それぞれ省筆されているとする。山本氏が指摘されるように、「年たけて」歌が古典世界を彷彿させる用語によって構成されていることは否定されるものではないが、さりとて、それを理解することによって西行歌が十全に把握されるとは思われない。また、そのことは「小夜の中山」という歌枕についても言い得る。

- (3) 西澤美仁氏「西行へのもどかしさ」(『中世の文学・附録7』、昭54・4)、大野順一氏「『命なりけり』考」(『文学』54・10、昭61・10)、森重敏氏「新古今撰入 西行法師和歌講(四)」(『ことばとことのは』6、平1・12)の該歌説明部分、など参照。
- (4) 下西善三郎氏「西行と〈中山〉——歌枕地名の〈へ象徴〉——」(『日本文学』平2・12)では、「中山」なる語に着目して、そこ(小夜の中山)で西行が「命なりけり」という感慨を表出する必然性を説く。
- (5) たとえば、久保田淳氏「西行」(『中世和歌史の研究』所収、明治書院、平5)では、「年たけて」歌を掲げたのち、「や

がて、海道を東下する旅人の視界いっぱい、高く秀でた富士山が聳える」と、詠出の順序を示唆する説明を加え、「風になびく」歌を掲げる。

(6) 松村雄二氏「西行と定家——時代的共同性の問題——」

『論集西行』所収、笠間書院、平2）参照。

(7) 糸賀きみ江氏「新古今集雑部における西行歌の位相」(『論集西行』所収、笠間書院、平2)、および拙稿「西行の鈴鹿山の一首について」(『上田女子短期大学紀要』15、平4・3)、参照。

(8) 『新編国歌大観』(第一巻―第十巻)の索引において確認することのできる使用状況を示すと、「さや」：二七一例、「さよ」：一六〇例である。この数字は重複する歌をそのままに数え上げたものであり、またそれぞれの歌集の伝本によって異同も認められようが、一応の目安となるであらう。

(9) 顕昭は『袖中抄』において、「彼土民等さよの中山と云り」という師仲が語ったとする説を示したうえで、「土民等が説は、和歌には叶はずとみゆる事多し」とそれを退け、「さや」を和歌(古歌)における正しい読みと認定している(『日本歌学大系』別巻二所収の本文による。一六二頁)。この記述からは、当地の人々の読みということ、(都に

おいても)一部に「さよ」説が支持されていたことが窺われる。

(10) 引用は黒川昌享・王淑英氏『自讃歌古注十種集成』(桜楓社、昭62)により、一部表記を改めた。二二七頁。

(11) 『続詞花集』巻第六「冬」にも、「行路初雪をよみ侍りける」として収載されている(三〇五番歌)。第四句は「初雪ふれり」。

(12) 「小夜の中山」が「(恋の)隔ての山」として認識されていたことを否定するものではない。

(13) 有吉保氏編著『千載和歌集の基礎的研究』(笠間書院、昭51)第三章「羈旅部の配列構成」、一〇二頁。

(14) 萩谷朴氏『平安朝歌合大成』を略称、以下同じ。引用は同書本文による。

(15) 注4下西氏前掲論文は、掲出の俊頼歌を示して、「さやの中山」とは、「中山」という呼称において生成する、「あづまぢ」における唯一の「隔ての山」だったのではあるまいか。そして、その「隔ての山」は、『旅』の歌において、〈境界〉の象徴詞としてはたらく一面を有したのではあるまいか。

と、〈都〉―〈中山〉―〈相模国〉という構図を説明する。

(16) 竹下豊氏『堀河百首』の名所歌枕詠——堀河百首研究五」

〔「女子大文学」40、平1・3〕は、掲出の師頼歌にたいして、「地理的実在性に着目して、冬の旅の様子を詠んでいる所が新鮮である」と述べ、「直接その歌が勅撰集に入集して、顕彰されることはなくとも、きたるべき『新古今集』の時代への道筋に、相応に位置づけられるべき歌は、『堀河百首』の中には少なくない」と結論づけておられる。「小夜の中山」の表現史の上での該歌の意義の大きさを指摘する見解は従うべきものと思われるが、竹下氏論には本稿がこれまで着目してきた「恋歌」から「羈旅歌」へという大きな転換についての直接的な言及は見られない。そのことを加味するならば、『堀河百首』の師頼歌の果たした役割もいっそう際立つように思われる。

(17) 清輔『和歌初学抄』では「小夜の中山」にたいして「ナカナカトソフ」とだけ注する。歌学書においては実作との相互関係を確認することができない。

(18) 掲出の歌をもつても知られるように、旅人の行路を阻むものとしては、師頼歌以来、多く「雪」が用いられているのであるが、それとは異なる春季の「霞」が配されているのは珍しく、新たな試みの一つと言えるだろう。

(19) aの作者連覚法師については未詳ながら、『山路歌合』

は顕輔主催と言われているもので、六条家との関わりが推察される。

(20) 「歌枕『諏訪湖』の消長——院政期・中世初期の詠歌を中心として——」(『上田女子短期大学紀要』16、平5・3) 参照。

(21) 俊成自身の詠にも「小夜の中山」は、後掲「旅ごろも」歌(新後撰集にも)のほか、

日数ゆく草の枕をかぞふれば露おきそふるさ夜の
中山

という治承二年五月の「右大臣家百首」での詠(長秋詠藻・「旅」五首・五四七、新千載集にも)、そして、まろぶしの柴のしきるに露ぞおく夜や更けぬらん
さよの中山

という「春日社百首和歌」の詠(五社百首・「旅」・二九三)に確認することができる。三首は、俊成晩年のものではあるが、ともに「旅」題によって「小夜の中山」を捉えていることからすると、俊成も『堀河百首』時代以降の詠風を理解していたものと推察される。

『千載集』における「小夜の中山」詠二首撰入の事実、『堀河百首』以後引き続いて行われた試みにたいする俊成の肯定的な理解の結果と一応は受け止めて

よいだろう。

- (22) 『式子内親王集』(二八二番)では、下句「草引きむすぶさやの中山」。

- (23) 『古今集』の羈旅歌を取り上げた論に、松田武夫氏『古今集の構造に関する研究』(風間書房、昭40)所収の第七章「羈旅歌の構造」、森朝男氏「『羈旅』の特色と構造―古今和歌集の部立」(一冊の講座『古今和歌集』所収、有精堂、昭62)などがある。また、八代集を中心とした羈旅歌の変遷を取り扱った論に、安田徳子氏「旅人のいる風景―羈旅歌の変遷をめぐる―」(『名古屋大学文学部研究論集C』文学34、昭63・3)、同氏「実詠から題詠へ―羈旅歌の変容をめぐる―」(『岐阜教育大学国語国文学』10、平3・3)などがある。

- (24) 『新古今和歌集の研究 基盤と構成』(三省堂、昭43)第五章「羈旅部の構成と特質」参照。

- (25) 「定家と家隆―新古今集羈旅歌の排列より―」(『新古今的発想論』所収、桜楓社、昭56)

- (26) 「『新古今集』羈旅部の構造―羈旅歌表現の展開―」(『後藤重郎先生古稀記念国語国文学論集』所収、和泉書院、平3)

- (27) 「『新古今集』編纂にはたらいた意識」(全集・6『新古今時代』所収)等、参照。

- (28) 注24有吉氏前掲書では、九三二番の俊成歌から巻末までを当代歌人群とし、注25奥田氏前掲書では、九五二番の定家歌から巻末までを当代歌人群とする。本稿では九三二番の俊成歌をもって、当代歌人群のはじめとしておく。また、はやく日本古典文学大系『新古今和歌集』(岩波書店、昭33)には、「羈旅歌」巻頭の八九六番歌頭注に「羈旅の歌の排列はいささか趣を異にしている。数首の例外はあるが、まず初めに万葉歌人の作を並べ、ついで平安時代の歌群に移り、最後に当代歌人の作を並べるといふ体裁をとっている」という指摘がなされている。

- (29) 注26安田氏前掲論文、参照。

- (30) 「『新古今集の『古』と『新』」(鑑賞日本の古典『新古今和歌集・山家集・金槐和歌集』所収、角川書店、昭和52)、四〇九頁。

- (31) 久保田淳氏『新古今和歌集全評釈』第四卷(講談社、昭和52)、該歌の「鑑賞」、参照。

- (32) このような例は『新古今集』に収載されている古歌において決して珍しいものとは言えないが、このこと

から「羈旅歌」の撰歌や配列に関する意図が窺われるように思われる。本稿が取り扱っている歌のなかでは、Mの匡房歌についても同様の指摘は可能である。

匡房歌は『江帥集』では「鳥羽院の御位の時、夜ふけて雁を聞く」とあるものが、集では「雁」という季が表面から消されて、「題しらず」とされている。当代歌人群の中にあつて、やや奇異な印象を与える匡房歌が越前、丹後の歌とともに並べられていることは、それが旧歌人群の歌とは異なる、新古今風の詠風を示していると受け止められたがためと考えられる。

(33) 注24有吉氏前掲書、参照。

(34) 「宇津の山」を詠んだD定家歌、E長明歌の二首は、ともに『元久詩歌合』の「山路秋行」題のもので、ここにおいても増補がなされている。同題による同歌合からの新古今撰入歌(総数八首、「水郷春望」題によるものの三首)に慈円(三六〇番歌(秋歌上)、家隆の五〇六番歌(秋歌下)、そして羈旅歌の九八二・九八三に続いて配されている慈円歌(九八四歌)があるが、その「山路秋行」題は、一部に「宇津の山」詠の補入を予定するものであったとも推測される。

(35) 小島吉雄氏「新古今和歌集の撰定と後鳥羽上皇」(『新

古今和歌集の研究 続篇』所収、新日本図書、昭21)、など参照。

(36) 大野順一氏「桜花賦」(『文学』季刊5・1、平6・1)は、「嵐」、とりわけ桜を散らす春の嵐に注目し、新古今歌人の嵐にたいする関心の深さを指摘、そこにこれらの好尚を読み取る。また、個々の歌人の風の歌を考察した論に、定家では久保田淳氏「新古今への道」(『新古今歌人の研究』所収、東京大学出版部、昭和48)が、西行では稲田利徳氏「西行の風の歌——その系譜と特色——」(『中世文学研究』3、昭52・7)などがあり、参考になる。『新古今集』が「風」よりもいっそう激しく動的な「嵐」を多く採用していることは、その表現世界を象徴しているように思われ、留意される。

〈参考〉「嵐」の使用数

古今	— 2 例
後拾遺	— 4 例
千載	— 10 例
新古今	— 48 例 (うち、羈旅歌 4 例)
新勅撰	— 20 例 (うち、羈旅歌 1 例)

(37) それには、題詠歌の発達ということも少なからず関与

しているように思われる。

(38) 『新編国歌大観』第一巻による。ただし、15『続千載集』の異本歌(二一四六、これも羈旅)と、21『新続古今集』の長歌(二〇四四)は、ここでは除外した。ちなみに、十三代集の用例中、「嵐」を取り込んでいるものは五例(11続古今・九二三、13新後撰・五八〇、15続千載・八三八、17風雅・九二七、20新後拾遺・八八七)を数える。

(39) 定家の詠草にも「小夜の中山」はつぎの三首に見出させる。

露しげきさやの中山なかなかにわすれてすぐる都
ともがな (五九二)

関の戸をさそひし人は出でやらで在明の月のさや
の中山 (一二九四)

まちあかすき夜の中山中中に一声つらき郭公かな
(二二〇八、新後撰集にも)

なかでも、二首目の「関の戸を」に関して、「在明の月」という表現、というよりも「小夜の中山」に「在明の月」を配したこと、が定家の意図したところであったようだ(「名所百首之時與家隆卿内談事」。そのことからすると、『新勅撰集』に定家が撰び入れた

家隆の「小夜の中山」詠は、定家自らも試みた「小夜の中山」の詠法であったと言える。しかし、「関の戸を」歌が詠まれた『内裏名所百首』(引用は、古典文庫本)においては、順徳院の

ささのははさやの中山ふくかぜにをのれねぬよの
夢もむすばず

をはじめとして、十二名の歌人たちがそれぞれに「小夜の中山」詠をのこしているが、そのうちの四首に「嵐」が配されており、「小夜の中山」が『新古今集』の羈旅歌の世界の著しい反映のもとに理解されているさまを見て取ることができ、その当時においても「小夜の中山」と「嵐」との結合は定着したものであったと言える。

(40) たとえば、風巻景次郎氏「新古今・新勅撰両集の風格の差の原因」(全集・6『新古今時代』所収)は、定家の和歌鑑賞の好尚の移行において、それを捉える。

(41) 引用は森本元子氏訳注『十六夜日記・夜の鶴』(講談社学術文庫、昭54)による。二一五頁。

(42) 渡邊裕美子氏「新古今時代の『宇治の橋姫』詠について」(『和歌文学研究』67、平6・1)は、新古今時代に流行した「橋姫」詠が『新勅撰集』に一首も入集し

ていない理由として、その流行ゆえに陳腐化してしまった「橋姫」詠を定家が忌避したためと指摘する。主なる原因は異なるかもしれないが、「小夜の中山」の取り扱いについても同様の傾向は確認される。

- (43) 藤平春男氏は、『定家八代抄』の性格ついて「定家の認めた作品を抜き集めた『詞華集』であるが、同時に作歌に際しての技術的参考書でもあった」（傍線、論者）と、指摘する。『新古今歌風の形成』（明治書院、昭44）第二章・II、参照。

- (44) 定家の「小夜の中山」にたいする認識は、かれ自身の詠草によってもおおそ理解されるが、「嵐」をその本意・本情を示すものとは捉えていなかったと考えられる。

- (45) 参考までに、「宇津の山」「伊勢の浜荻」の用例を両集にもとめると、『新勅撰集』ではいずれも見出だせない。また、『定家八代抄』では「宇津の山」一首（七九七・新古今の業平歌）と、「伊勢の浜荻」二首（八〇〇・新古今のよみ人しらず歌、八一六・千載集の基俊歌）が見出だせる。この点からしても、『新勅撰集』における撰歌は『新古今集』を相当に意識したものであることが推察される。

- (46) 頼阿註『自讃歌註』では、「年たけて」歌にたいして東の方へ修行して帰とて、くたりし時は此山を又こゆへし共おもはさりつるに又こゆれば、何事も命たにあればよき事にもあふとなり

という注が施されているが、傍線部のごとく、第二句「またこゆべしと」を旅の復路と解したもののである。一首の解釈としては適当でないと考えるが、『新古今集』の配列の中では、そのような解釈も成り立つであろう。頼阿註『自讃歌註』の引用は、注10前掲書（六八頁）による。